

エジプト学研究第 18 号 2012 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.18, 2012

目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
第 4 次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報	近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合 望・西坂朗子・高橋寿光	5
エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告—第 16 次・第 17 次発掘調査—	吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・馬場匡浩・西本真一・柏木裕之・秋山淑子	21
2011 年太陽の船プロジェクト活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	69
〈研究ノート〉		
両面加工石器製作の生産体制について		
—ヒエラコンポリス遺跡エリート墓地出土資料の分析から—	長屋憲慶	77
〈卒業論文概要〉		
岩窟墓の形態変化とアマルナ時代の影響	熊崎真司	85
〈活動報告〉		
2011 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告		93
2011 年 エジプト調査概要		97
〈編集後記〉	近藤二郎	103

The Journal of Egyptian Studies Vol.18, 2012

CONTENTS

Preface	Sakuji YOSHIMURA	3
Field Reports		
Preliminary Report on the Fourth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian ExpeditionJiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Takao KIKUCHI, Hiroyuki KASHIWAGI, Nozomu KAWAI, Akiko NISHISAKA, and Kazumitsu TAKAHASHI		5
Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Sixteenth and Seventeenth SeasonsSakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Masahiro BABA, Shinichi NISHIMOTO, Hiroyuki KASHIWAGI and Yoshiko AKIYAMA		21
Report of the Activity in 2011, Project of the Solar BoatHiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA		69
Articles		
Bifacial Flint Production Groups in the Predynastic Egypt: Analysis of finds from Elite Cemetery at Hierakonpolis	Kazuyoshi NAGAYA	77
Summary of the Recent Undergraduate Theses		85
Activities of the Society, 2011-12		93
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2011		97
Editor's Postscript	Jiro KONDO	103

両面加工石器製作の生産体制について ーヒエラコンポリス遺跡 エリート墓地出土資料の分析からー

長屋 憲慶*

Bifacial Flint Production Groups in the Predynastic Egypt: Analysis of finds from Elite Cemetery at Hierakonpolis

Kazuyoshi NAGAYA*

Abstract

Recent excavations at HK6, Elite cemetery, have discovered various kinds of bifacial flints. Among them, in particular, the bifacials in shape of bowtie, donkey, human, rhomboid lance and so-called fish-tail are remarkable. They have not only esthetic value but also are informative samples to know about the predynastic lithic technology, which enables us to identify artisan groups.

Deep observations into the masterpieces revealed that bifacials from HK6 had been made by particular technologies (sometimes by the certain person). It is possible that there were at least three flint artisan groups that can be identified in three criteria: raw material, technology and the products.

The first group is to make bifacials of symbols or animals. Material is mainly beige/ light brown flint. Donkey and bowties belong to the group. This group seems to be less skilled. The flaking patterns on the surface are rough and irregular, and surface has several mistaken parts as mentioned above.

The second group is to make animals in smaller size using arrowhead making technique, working on the dark brown/ black flints. The arrowhead technique is principally adopted to form long horns, legs or trunks. Because this technique constrains maximum size of products, the elephant biface was made smaller than the other animals of Group 1. Human-shaped biface should be the masterpiece of the group.

The third group is to make very elaborate things such as rhomboid lances and fishtail knives. Material is rare type of flint rock with murky black color. This group clearly has the highest skills typified by regular stripes pattern and denticulations. Mistakes like group 1 are hardly seen.

The paper clarified a new vision about the lithic production relevant to HK6. The elaborate bifacials for funerary rituals and burials of elites were provided by three particular groups each of which dealt with different raw material, technology and final product. The groups had an important role to support prestige of elites. And in another word, it is possible that these strict combinations guaranteed the value of bifacials as prestige goods.

* 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程

* Ph. D. Student, Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University

1. はじめに

ヒエラコンポリス遺跡(図1)は、ナカダ、アビドスに並んでエジプト先王朝時代最大規模を誇る遺跡である。これまでの調査によって、初期神殿、エリート墓地、労働者墓地、土器製作・焼成施設をはじめ、エジプトでは検出例の少ない集落址も見つかっている。このように多くの性格を有する複合遺跡であるヒエラコンポリスは、初期国家形成期のエジプトにおいてあらゆる角度から社会の複雑化の様相を議論し得る希有な遺跡である。

この遺跡の南西に位置するHK6地区はエリート墓地と呼ばれ、様々な副葬品を産出することで知られる。石器資料についても同様で、動物や抽象的なシンボルを象ったものをはじめ、ナイフ、石鏃など、多様な製品が出土している。これらの石器はエリートの副葬品という限定されたコンテキストを有することから、モノと場あるいはその背景にある社会とを直接にリンクさせて論じることのできる資料といえる。

本稿では、こうした対象遺跡の特性を踏まえ、ヒエラコンポリスのエリート墓地における近年の発掘によって得られた両面加工石器を扱い製作技術の分析を行う。これらの石器は当然、エリートたちの副葬品という特定の用途で制作された背景をもつ資料である。本稿の目的は、石器製作者たちがエリートのためにどのような技術を用いて何を作ったかという、遺跡内部の特定の条件下における石器製作の様相を考察することである。その上で、初期国家形成の途上にあったヒエラコンポリスにおいて副葬品の価値がどのような要素によって規定されていたのかを石器研究の視点から論じたい。

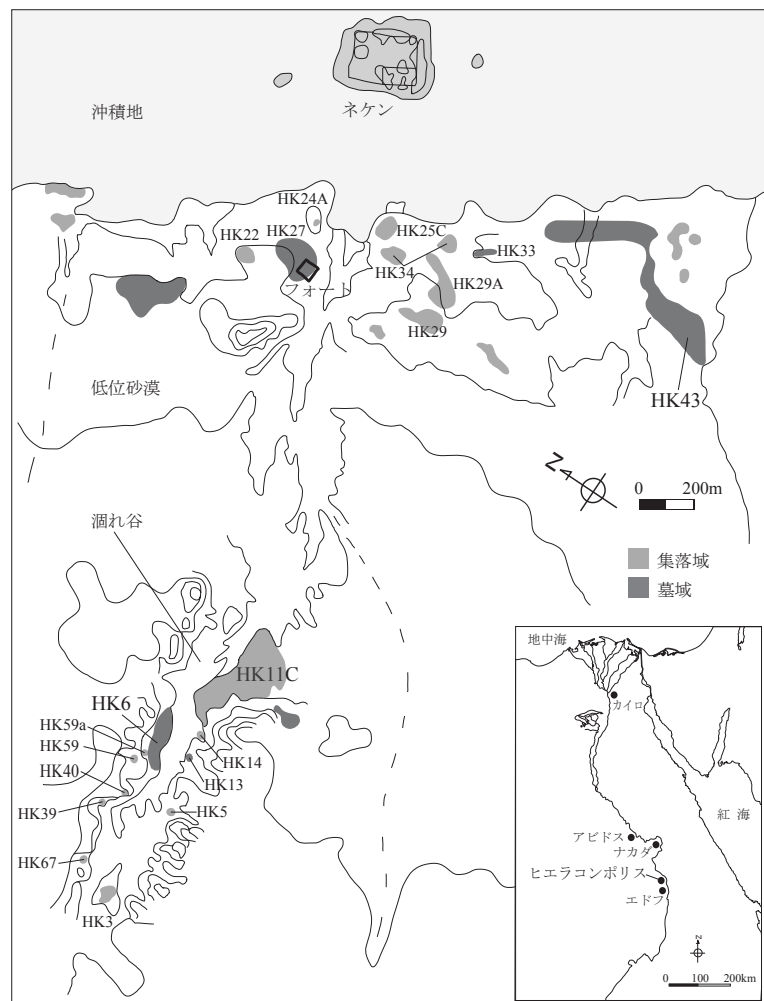


図1 ヒエラコンポリス遺跡 (Wengrow 2006: 74, Fig. 4. 1 をもとに作成)

Fig.1 Map of Hierakonpolis

2. エジプト先王朝時代の石器研究

この時期の石器研究はきわめて少ない。ここでは当該時期の代表的な研究例について、石器組成と製作技術の観点から簡単にまとめる。

ナカダ文化の石器組成を論じた研究で必ずと言ってよいほど取り上げられるのが、1980年代末に発表されたD. L. Holmesの学位論文である。この研究は、上エジプトに分布する石器群を網羅的に扱ったもので、ヒエラコンポリスを含む各地の先王朝遺跡の出土石器を比較し、剥片剥離技術の伝統が3地域に分かれることを指摘している。(Holmes 1989)。この論文は現在に至るまで唯一の包括的な資料に基づく石器研究とし

て位置づけられている。しかし一方では、遺跡の性格が考慮されないまま資料が扱われたため、それらの石器群の相違が果たして製作技術の地域性や系統をそのまま示すものであるのかが疑われる。事実、近年の報告によると、ナカダ II 期のヒエラコンポリスにおける多様な石器製作技術の存在が指摘されている。生産施設（HK11C 地区 A6-A7 区）と初期神殿付属の工房とされる HK29A 地区の双方から出土した石器を比較分析した高宮・遠藤は、両地区の石器製作には、剥離技術や石材の利用法、製品などの点で相違が認められるとしている（Takamiya and Endo 2011: 742）。このように、同時期の同遺跡においても遺構毎に多様な石器組成あるいは製作技術の存在が推測され、今後は発掘地区ごとの性格を考慮した石器組成の詳細な研究が求められるであろう。

また、本稿が扱う両面加工石器に関連する研究では、前述の高宮・遠藤による石器製作の動作連鎖（*chaîne opératoire*）研究が代表的である（Takamiya and Endo 2008: 8）。この研究は、1990 年代に Holmes (1992) によって分析された HK29A 地区の出土資料を再分析したものである。これによって、神殿付属の工房で行われた石器製作について、石材利用から製作剥片の特徴的な転用法、主となる製品の製作工程など、より具体的な様相が明らかとなった。

以上のように当該時期の石器研究は、1980 年代までに体系化された石器文化の全体像を、個別の出土資料やコンテクストに即した資料観察によって再度見直そうという動きにある。つまり近年の石器研究の主眼は、一遺跡に包含される多様な技術の様相を明らかにした上で、先王朝時代の石器文化を再構築することである。特にヒエラコンポリスのような様々な性質を有する複合遺跡な場合、遺構の性格別にひとつひとつ石器組成あるいは製作技術を検討し、その上で遺跡全体での石器製作技術を体系化することが望まれる。

3. 本稿の目的

先行研究を概観すると、エジプト先王朝時代の石器研究は、前世紀までに体系化された石器文化と、それに対し、より具体的なデータとコンテクストに立ち帰った再検討や反証を行うという近年の研究とに二分される。したがって現在では、石器文化の全体を語るに十分な資料・研究が出そろっているわけではないことがわかる。そのため現在の急務は、コンテクストの限定された一遺跡あるいは一地区を対象を絞り、初期国家形成期という脈絡の中で石器製作の様相を遺物あるいは事例毎に捉え直すことにある。

こうした考えのもと、筆者は本誌前号において、ヒエラコンポリス遺跡の性格の異なる複数の遺構から出土した両面加工石器について、製作技術の種類とその水準を比較検討した（長屋 2011）。結果、遺跡全体でみた石器製作技術は、製作者の専業・非専業にかかわらず極めて近似した水準にあったことが示された。さらに、こうした必ずしも技術的に突出していたわけではない両面加工石器が特にエリート墓地から多く出土することから、製作技術の高さのみが石器の威信材あるいは副葬品としての価値を規定するわけではなく、そこには別の何らかの要素が働いていたのではないかという展望を得るに至った。

そこで本稿は、ヒエラコンポリスのエリート墓地（HK6 地区）出土の両面加工石器という、遺構・遺物の性格・用途の限定された出土資料を扱い、一つの墓地に供給された石器とその製作の様相について考察する。その上で、初期国家形成期の同遺跡において、両面加工石器がいかなる理由によって威信材・副葬品としての価値を有していたのか論じたい。

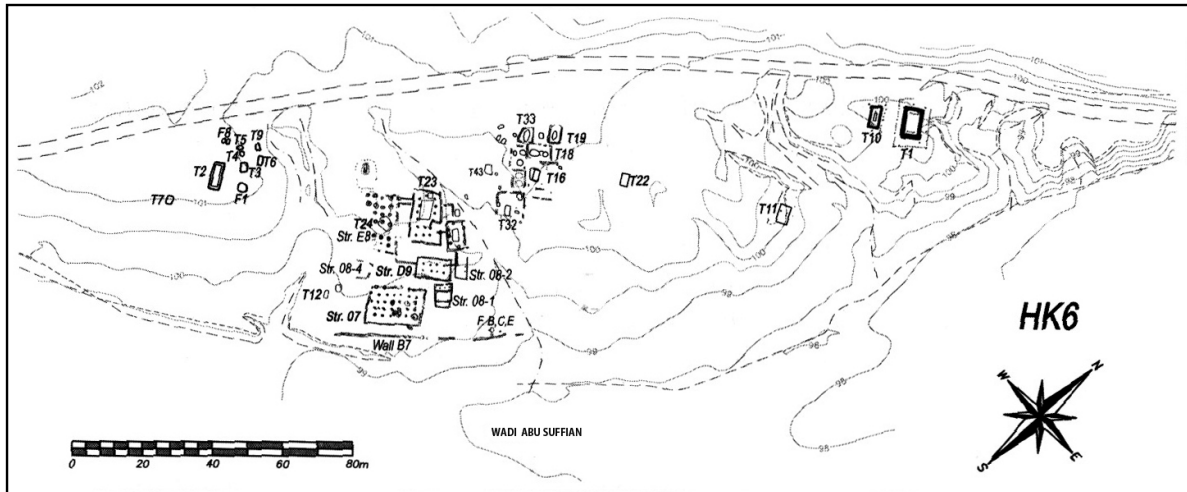


図2 HK6 地区 (Friedman et al. 2011, fig. 1 を改変)

Fig.2 HK6, Elite cemetery at Hierakonpolis

4. 対象資料と分析の方法

エリート墓地 (HK6) (図2) は、1979 年から現在に至るまで調査が行われている (Adams 2000a, 2000b; Friedman 2000, 2005, 2006)。遺跡の性格は、支配者層の墓地とされ (Friedman et al. 1999)、ナカダ IC-III 期に年代づけられる (Adams 1998: 3)。この墓地からは際立って多くの両面加工石器の出土が確認されている。特に、動物を象ったものがここでは特徴的に見られる (Friedman 2000; 高宮 2010)。

表1 HK6 地区出土の両面加工石器

Table1 Bifacials from HK6

資料No.	製品	残存度	寸法(mm)		
			長さ	幅	厚さ
1	動物(ロバ)	完形	116	68	8
2	蝶ネクタイ形	完形	74	36	6
3	蝶ネクタイ形	完形	72	37	6
4	蝶ネクタイ形	半損	44	32	6
5	蝶ネクタイ形	半損	44	35	7
6	ヒト形	完形	103	32	8
7	動物(ゾウ)	頭部～鼻部のみ	39	37	5
8	動物(アイベックス)	頭部・脚部欠損	45	36	5
9	有茎鏃	完形	32	14	2
10	長脚鏃	完形	55	19	4
11	動物(アイベックス?)	角のみ	36	13	5
12	魚尾形	基部のみ	64	34	7
13	魚尾形	刃部のみ	36	43	5

本稿では、近年の発掘でこの墓地から出土した13点の両面加工石器を扱う(表1、図3)。出土資料の形状は多様で、ヒト、ロバ、ゾウ、アイベックス等の生物を模したものの、蝶ネクタイ形の抽象的なシンボル、石鏃、先王朝時代の各遺跡で広く出土する魚尾形ナイフ (Hikade 2004: 9-10) から成る。以下では、これら資料について、1) 石材、2) 製作技法、3) 製品、の3点から観察・分類する。

まず石材は、すべてフリントが用いられている。これらは色合いによって大きく3分類され、ベージュに近い淡褐色、焦げ茶色に近い濃褐色、黒色の3種類から成る。

製作技法については、2段階の工程に着目する。製品のみを観察対象とした場合、両面加工石器の製作に用いられる技術と工程は、平坦剥離によって石材を薄く割りながら全体の大まかな形状を作り出す成形工程

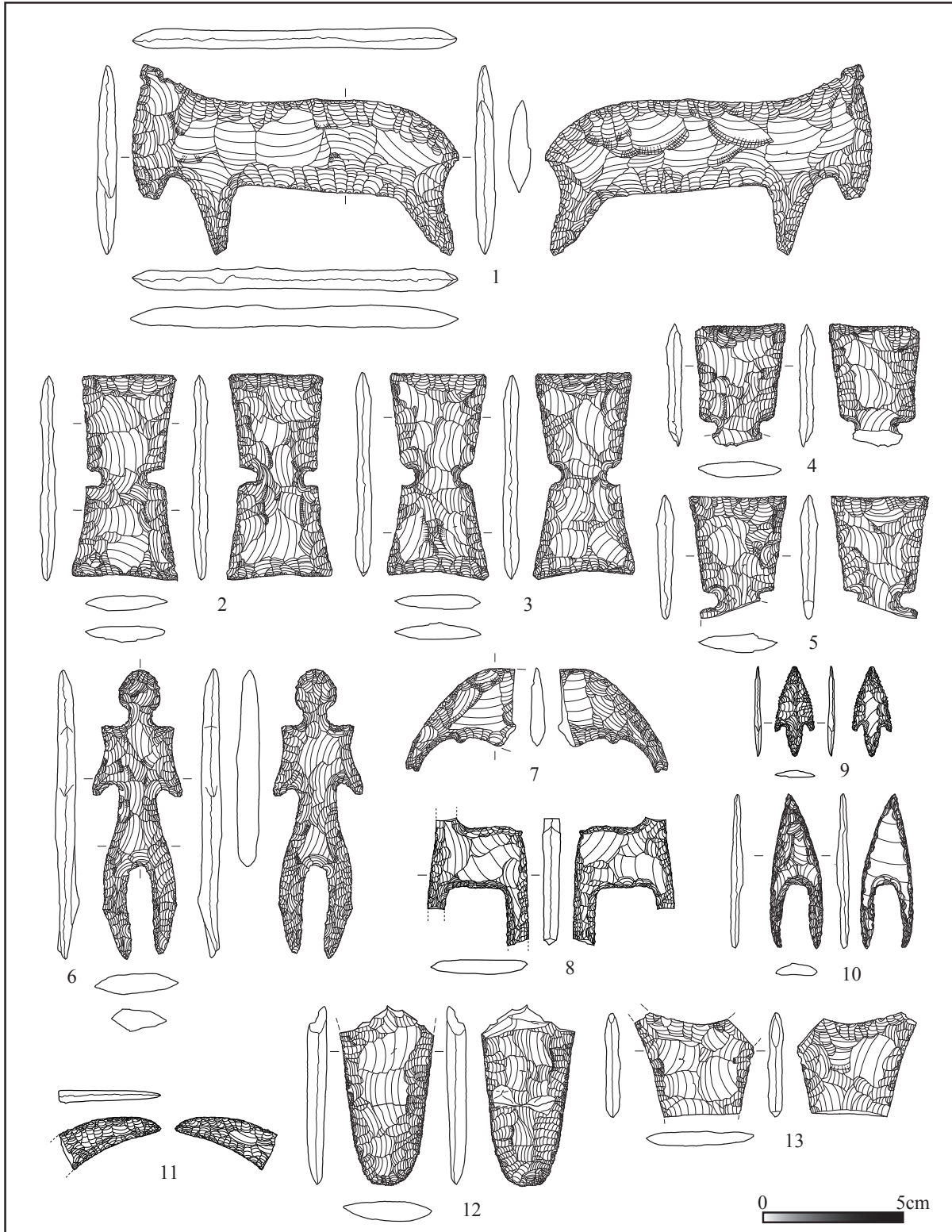


図3 HK6 地区出土の両面加工石器
Fig.3 Bifacials from HK6

と、周縁部への押圧剥離によって仕上げを行う整形工程に大別される（長屋 2011: 105）。ここでは、成形工程での剥離失敗の有無と、整形工程における剥離の規則性について観察する。

製品については、完成された石器の形状を分類し、上記の石材と製作技法との関連性について考察する。

5. 分析・考察

石材、製作技法、製品の3項目からの分類結果を表2に示す。興味深いのは、HK6地区から出土した両面加工石器が、上記3つの組み合わせの違いによって3分類されることである。

表2 分析結果一覧
Table2 Attributes of Bifacials

資料No.	類型	1		2		3
		石材	製作技法		製品	
			成形工程	整形工程		
1	1	淡褐色	+	不連続な押圧剥離	動物(ロバ)	
2		淡褐色	+	不連続な押圧剥離	蝶ネクタイ形	
3		淡褐色	+	不連続な押圧剥離	蝶ネクタイ形	
4		淡褐色	+	不連続な押圧剥離	蝶ネクタイ形	
5		淡褐色	+	不連続な押圧剥離	蝶ネクタイ形	
6	2	濃褐色	+	石鏃製作技法	ヒト形	
7		濃褐色	+	石鏃製作技法	動物(ゾウ)	
8		濃褐色	+	石鏃製作技法	動物(アイベックス)	
9		濃褐色	+	石鏃製作技法	有茎鏃	
10		濃褐色	+	石鏃製作技法	長脚鏃	
11		濃褐色	+	石鏃製作技法	動物(アイベックス?)	
12	3	黒色	-	連続的押圧剥離	魚尾形	
13		黒色	-	連続的押圧剥離	魚尾形	

1類は、蝶ネクタイ形や比較的大型の動物形の石器に代表される。これらは総じて淡褐色のフリントを原材として製作される。製作技法は、比較的大雑把に行われる成形工程と、不連続な押圧剥離による縁辺部の調整が行われる整形工程からなる。特にはじめの成形工程においては、剥離面が歪な階段状に残される剥離失敗が共通して観察された。また蝶ネクタイ形の2点については、この失敗の修正を試みた押圧剥離の痕跡が見られた(図4)。この剥離は、“Push throughs”と呼ばれ、平坦剥離の失敗によって階段状に剥離されてしまった歪な石器表面を平坦に修正するための技法とされ、ナカダ期に代表的な波状剥取ナイフ(Ripple flaked knife)の剥離面にもしばしば認められる(Kelterboen 1984: 450)。

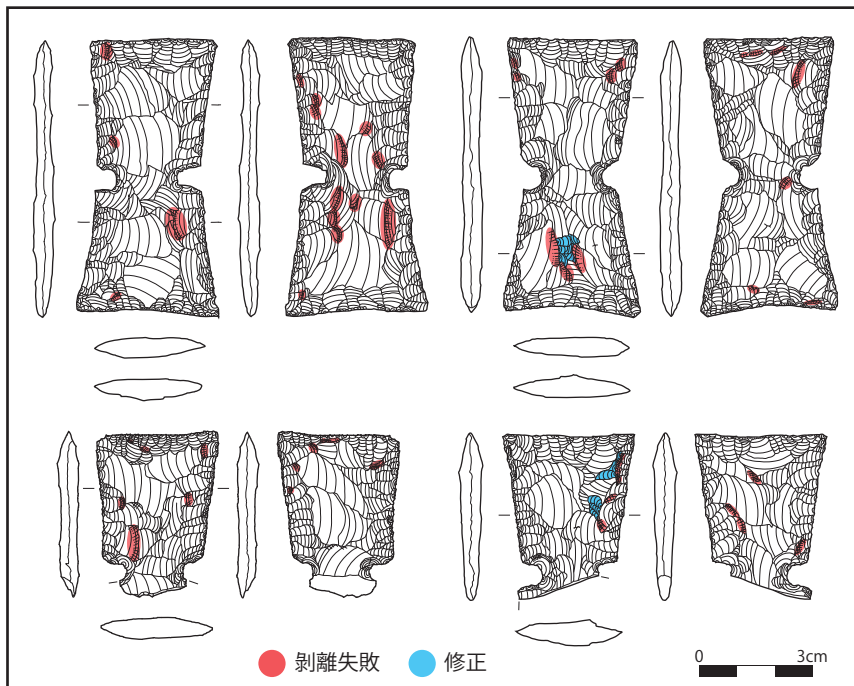


図4 剥離失敗と修正の痕跡
Fig.4 Mistakes and recoveries observed



図5 外形比較
Fig.5 Overlay of outlines

また、蝶ネクタイ形の資料4点についてさらに注目すべきは、製作技法のみならず製品の外形が完全に一致する点である(図5)。この結果からは、これらが同一の人物によって同時に製作された可能性が高いことが推測される。

2類は、比較的小型の動物や人間を象った石器に代表される。濃褐色の石材が主に用いられている。2類の最大の特徴は、石鏃の製作技術が応用されている点である。すなわち、押圧剥離を用いた石鏃の脚部や翼部を抉り出す技法そのものが、動物の角や足の造形に用いられている。ここで興味深いのが、これら石器のサイズが1類よりもはるかに小型な点である。たとえば、動物そのものの実寸は最大であるはずのゾウ(図3)が、1類のロバの半分程度の大きさで作られている。これは、動物の身体的特徴と石鏃の製作技法の双方に起因する。つまり、長い角や足あるいは鼻の造形には石鏃の製作技法が必須である反面、この技法自体が、1類のような大型の石器製作には向かないためである。

3類は、魚尾形のナイフに代表される。製作には黒褐色のフリントが選択される。3類の特徴は、1、2類とは異なる製作技法が極めて高い水準で実施されている点である。それは、石器中心軸にまで及ぶ細長く連続的な押圧剥離による整形を行い、さらに周縁部には1mm四方の大きさで微細な押圧剥離がなされている点である。3類には剥離失敗はほとんど観察されず、これらの製品は1、2類とは一線を画する技術と技能を以て製作されたと考えられる。

6. 結論

エリート墓地に供給された両面加工石器は、製作に用いられた原石、製作技術(とその水準)、製品という3項目の組み合わせを明確に異にする、少なくとも3類型に分けられた。2類型については、製品の形状と石鏃の製作技法上の特徴との間に物理的な限定条件があったために、製品と技法の組み合わせが規定された。しかし、すべての類型で用いられる石材はフリントという物質的に同一のものであるため、色調による加工難度の相違はない。したがって、これら3つの類型化は、単に石材や技法といった物理的条件に起因しているわけではないと理解できる。

一方で、筆者は本誌の前号において、先王朝時代の石器製作の技術水準は、遺構の社会的階層にかかわらず極めて近似したものであり、専門的な製作者でなくとも欲すればエリート墓地に副葬される石器と同様のものを当時の人々が製作することができたとの見解を得た(長屋2011)。事実、製作剥片を伴う精巧な魚尾形ナイフが土器製作址からも出土することが確認されている。つまり、遺跡全体で見れば比較的均一の水準の製作技術が自由に採用・実施されていたと考えられる(長屋2011)。

これらを総合すると、本稿で明らかになった点として、エリートの副葬品としての石器製作には、特定の石材、技法、製品の組み合わせから成る3つの類型が存在し、且つその類型分化は何らかの人為的な選択が働いた結果であることが指摘できる。これら3類型が石器製作集団の相違によるものであるのか、あるいは1集団内での使い分けであるのかについては未だ判然としない。しかし、少なくともこうした現象がエリート墓地のみにおいて認められることから、特定の石材、技法、製品の組み合わせが、石器の副葬品としての価値を規定していた可能性が考えられる。言い換えると、たとえ同様の技術を用いて同じ石器が製作可能であっても、それが相応しい生産体制、すなわち材料、方法、場所、またある場合にはヒトのもとで製作されなければ副葬品としての価値が当時の社会の中で認められなかった可能性が推測される。すなわち、エリート墓地から出土する両面加工石器は、石材、技法、製品の特定の組み合わせで作られたという、いわばオーソライズを受けることで、共同体の中で固有かつ共通の価値が付与され、支配階層の「威信」を保つ装置として働いたと考えられる。

謝辞

本稿を草するにあたり、ヒエラコンポリス調査隊隊長の大英博物館レネ・フリードマン博士には、出土資料の使用許可をいただきました。早稲田大学文学学術院近藤二郎教授には、多岐にわたるご指導・助言を賜りました。早稲田大学エジプト学研究所馬場匡浩先生には、先王朝時代研究に関する様々なご指導を賜りました。ここに記して感謝いたします。

参考文献

Adams, B.

1998 “Something Very Special down in the Elite Cemetery”, *Nekhen News* 10, pp.3-4.

2000a *Excavations the Locality 6 Cemetery at Hierakonpolis 1979-1985*, London.

2000b “Some Problems Solved in the Locality 6 Cemetery”, *Nekhen News* 12, pp.4-6.

Friedman, R.

2000 “Figures in Flint”, *Nekhen News* 12, p.14.

2005 “Excavating Egypt’s Early Kings”, *Nekhen News* 17, pp.4-5.

2006 “Bigger Than an Elephant. More Surprises at HK6”, *Nekhen News* 18, pp.7-8, 16.

Friedman, R., Maish, A., Fahmy, A. G., Darnell, J. C. and Johnson, E. D.

1999 “Preliminary Report on the Field Work at Hierakonpolis”, *Journal of American Research Center in Egypt* 36, pp.1-35.

Friedman, R., Neer, V. W. and Linseele, V.

2011 “The elite Predynastic cemetery at Hierakonpolis: 2009-2010 update”, in Friedman, R. and Fiske, P. N. (eds.), *Egypt at its origins* 3, *Orientalia Lovaniensia Analecta* 205, Peeters, pp.157-191.

Hikade, T.

2004 “Prestige and skill- Fishtail knives in Predynastic Egypt”, *Nekhen News* 16, pp. 9-10.

Holmes, D.L.

1989 *The Predynastic Lithic Industries of Upper Egypt: A comparative study of the lithic traditions of Badari, Naqada and Hierakonpolis*, BAR (15), Oxford.

1992 “Chipped stone-working craftsmen, Hierakonpolis and the rise of civilization in Egypt”, in Friedman, R.F. and Adams, B. (eds.), *The followers of Horus: Studies dedicated to Michael Allen Hoffman 1944-1990*, Oxford, pp.37-44.

Kelterborn, P.

1984 “Towards Replicating Egyptian Predynastic flint knives”, *Journal of Archaeological Science* 11, pp.433-453.

Takamiya, I and Endo, H.

2008 “Return to the Temple Workshop: The Manufacture of Bifacial Flint Tools”, *Nekhen News* 20, pp.8-9.

2011 “Variations in lithic production at Hierakonpolis: A preliminary report from the excavation of HK11C square A6-A7”, in Friedman, R. and Fiske, P. N. (eds.), *Egypt at its origins* 3, *Orientalia Lovaniensia Analecta* 205, Peeters, pp. 727-744.

高宮いづみ

2010 「ヒエラコンポリス遺跡とナカダ遺跡 — エジプト先王朝時代の両面加工石器に関する比較考察 —」、『比較考古学の新天地』、菊池徹夫編、同成社、pp.1054-1064.

長屋憲慶

2011 「エジプト先王朝時代の石器製作技術 — ヒエラコンポリス遺跡出土資料の比較 —」、『エジプト学研究』17号、pp. 99-113、早稲田大学エジプト学会。

エジプト学研究 第18号

2012年3月31日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.18

Published date: 31 March 2012

Published by The Egyptological Society, Waseda University

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Institute of Egyptology, Waseda University